

福祉系 対人援助職養成の 現場から²⁸

西川 友理

こんなふうに着ったのに！

学童保育のボランティアから帰ってきたAさんが私に憮然と言いました。

「先生、Iメッセージを言っても、子どもに伝わらなかったですよ。」

Iメッセージは、簡単に言うと「主語を自分にして、自分の思いを素直に相手に伝える」手法です（この連載の第20回目に、Iメッセージについて詳しく書きましたので、参考にしてください）。

「伝わらないって？」と私。

「だから、子どもがちっとも言うこと聞

いてくれなかったっていうこと！」

暴言を吐いてくる子どもに、「そんなん言われたら、お姉ちゃん悲しいわ。」と言ったところ、「あっそ！」と返され、無視され、さらに暴言が続いた、ということらしいのです。

「うーん、子どもに『子どもに言うこと聞いてほしい』と思ってたのに、『悲しいわ』って言ったのだったら、それってIメッセージじゃないんじゃない？」

「べっ、別に言うこと聞かそうと思っていったわけじゃ……」

「『言うこと聞いてくれへん』って言う

たよ、今。」

「そ、そんな子どもの主体性を無視するようなこと…考えてたわけでは…。そ、そもそも先生、悲しかったら『悲しい』って言うたらええって言うたやん！私悲しかったもん！」

Aさんは私を攻撃してきました。

「そうやねえ、私そう言ったね。でもね、小手先の技術で『悲しいと言う』んじゃなくてさ。多分、自分がどういう思いをしているのかという事をきちんと把握する必要があるんやないかなあ…。」

「??…よくわかりません！」

相談援助に関する授業では、よくロールプレイをします。

「傾聴」について講義していた時の事です。「相手の話をしっかり聴くことが大事」ということを講義し、まずは自分なりに「相手の話をしっかり聴く」という態度をとってみよう、とロールプレイをしました。

B君は、腕組みをして、顎を引き、眼光鋭く練習相手をぐっと見て、話を聞こうとしました。

「こわーっ、そんな顔して見んといて！」

「それ、なんかで見たことあるわ、えーっと、あれや、ラーメン屋の店主の写真！」

と周りの学生に言われて、B君は戸惑います。

「えー…だって、相手の話をしっかり聞こうと思ったら、こうなるもん。先生、僕おかしいですか？」

「うーんそうやね、怖がってるね、みんな。」

「ええ…じゃあ僕のやり方はダメなんですね…。」

「ダメっていかさ、どこがマズいのか考えようよ。」

と言っても、落ち込むB君です。

AさんもB君も、授業で言われたことを真面目に守って、うまくいかなかったとジレンマを感じています。

「そうね、確かに私は授業でそう言ったね。だけど、それってどういうことなのか、一緒に考えましょう。」

という授業展開は、個人的に大好きです。

「正しいはずの事」に対する違和感

実習が終わった直後、実習先で出会った経験を、皆で話し合う授業をしました。こんな支援を見た、あれが素晴らしかった、これが勉強になった…と一人ずつ楽しそうに語る学生達。

そんな中、児童養護施設で実習をしてきたCさんは、静かに話し始めました。

「実習先で、ある子どもがなかなか宿題をしてくれなかったんです。」

「現場の先生に聞いたら、『ああ、あの子が言うことを聞かない時には“〇〇先生に言って、叱ってもらおう！”って言うたらいいよ』と言われました。」

「だからそう言ってみたら、本当に一生懸命やりはじめたんです。…すごいなあ、と思って。」

「…一人一人の特性をよく見て、言葉かけをするのが大事なんだなあ、と、思い、ました…。」

と、ぽつぽつ途切れながら語るCさんは、

なんだか浮かない顔。

「…Cさん、それ、勉強になったなあって、本当に思ってる…？なんだか、納得してないって顔をしてるように見える。」

と私が言うと、Cさんは突然ぽろっと涙をこぼしました。

「なんか…確かに、言うことは聞いてくれたんですけど、言うこと聞かせただけ、っていうか、結局、何をやったんやろう私、って思って…」

他の学生は、静かにCさんを包むように話を聞いています。

「大事なことは何やってんやろうね。言う事聞かせる事やったんやろうか。」と私が言うと、聞いていた学生の一人がぽつりと

「えー…何かそれって…違うやん…」と言いました。皆で、考え込みました。

教科書で習った理念、制度。学校や実習先の先生が教えて下さった技術、技法。

それらは「正しいもの」として学生に提示されます。

しかしそれらをいざ実践してみると、上記のように、なんだかおかしい、どうもしっくりしない、と感じることがあります。「正しいもの」として提示されたものに違和感を持つのは、なんだか少し不安があります。

違和感について

自分の行動に対して、違和感を持ったと誰かから指摘された時に、その発言そのものを事実として受け止めることが、

正直に言うと私は苦手です。日本の文化で育った人は、私と同じように、苦手な人が多いように感じています。学生たちの間にも、冒頭のAさんやB君のように、その場の空気や関係する人を否定する感情を持ったり、自分自身を否定しすぎたりということがよくあるように見受けられます。

また、Cさんは、違和感を持ったことを口にする事を躊躇し、いざ口にした時には涙が出てしまいました。

私もやはり、違和感を持ったことを口にする事に、少しだけ勇気が要ります。その場の空気や関係する人を否定しすぎたりしないか、そしてさらに言えば、違和感を持った相手に指摘することで、相手に憎まれてしまわないか、「正しいもの」に反旗を掲げることになって、意図せず何かと戦わねばならない事態にならないか、と軽い緊張が走ります。年を重ねるにつれ、少しずつ気にしなくなりましたし、そこから始まる展開にむしろ面白さを感じるようにはなりましたが、それでもやはり、相手に何かを指摘をする時には何かしら気が引き締まります。

「知っている」「わかる」「なんとなくそうだよね」と言わなくても通じるような空気と予定調和を大切にするウチ的な日本文化において、安心安全な生活を送っていると、自分が「おかしい」と言われる事を受け止める力、疑問を持って「なんだか変だ」と口にする勇気が、育ちにくいように思います。

さらに言えば、違和感を取り扱う力や技術が育っていないと、そもそも違和感そのものを感じ取る力が弱くなるよう

にも感じます。つまり、「これはこういうもの」「こうあるべきもの」という状況を受け入れざるを得ない生活文化の中ですごしていると、違和感の感受性が弱っていくように感じるのです。

ごま塩のレシピ

時々見る料理サイトに、ごま塩の作り方が掲載されていました。

ごま塩にレシピがあるなんて！ごま塩なんて、ごまと塩を混ぜるだけ、と思っていました。そういえば、市販されているごま塩の塩は白い顆粒状になっていたり、ゴマ自体に塩味がついて白っぽいゴマだったりします。単純に、黒ごまと塩を混ぜただけのものではないようです。興味を持ってレシピを探しますと、黒ゴマをしっかり炒る、水で塩を溶かしてゴマと混ぜる等、作り方には結構コツがいるようです。

「そうか、ごま塩も立派な料理なんだ。」今まで気づきませんでした。ごま塩を作ってみたくくなりました。

人間や法律、支援技術について、知っている、わかっている、これはこういうもの、こうあるべきもの。そのような思い込みや常識が、なんと様々なものを見えなくしているのか、と思います。

しかしその一方で私は、「この業界ではこれが正しいとされ、こうあるべきだとされているのだから、これを覚えなさい」と、学生に伝える仕事をしています。

上記のごま塩の例でいえば、「ごま塩は、ごまと塩からできています」と言え

ば、授業は事足りるのです。しかし、「おいしいごま塩とはどういうものなのか」「実際にどうやって作るのか」「ごま塩づくりのコツはなにか」等がわかっていないと、おいしいごま塩は作れません。それらを学生に伝えるには、世の中にはあまりにたくさんのレシピがありすぎる。又私もそれらのレシピを全て熟知しているわけではない。必然的に「正しいこと」の枠組みを伝える授業が続きます。

「枠組みだけを伝える授業でいいのかなあ。かといって伝えられる内容には限界があるよなあ。」

そう悩んだこともありました。

正しいとされている事を知って、さて、どうするか

私には、大変尊敬する保育の専門家のD先生という方がいます。D先生の講義は大変勉強になり、気付きもあります。困った時、迷った時に相談をすると、明快で的確なアドバイスがいただけます。

「そんなん、こうやったらええやんか。」

なるほどなあと思い、D先生に感謝を伝え、実際にやってみます。

ところが、どうもうまくいかないのです。D先生が言うとおりにしているのに。

そんなことが2度あり、3度目に私はアドバイスを参考に、じっくり考えた上で、全く別の手法をとりました。

「そうだ、私はD先生ではないんだもの。D先生と同じ教育は出来ないよ。D先生のおっしゃっている事の、大事な部分は何だろう。そこを、私だったらどう行動

する？」

そう考えて行動した結果、大変うまくいきました。

正しいとされていることを鵜呑みにせず、それを基に考え、行動するという、当たり前なのに気付くのに、少し時間がかかりました。

そして今は、学生に対しても「自分で気づく時に、自分で気付く形で、違和感に気付いてもらえばいい」と思います。

そのために、いつでも安心して違和感を表現してもいいという環境づくりが大切だと思うのです。

正しさに違和感を覚える大切さ

ある精神科医の方がラジオで『歎異抄』について語っておられるのを聞き、また人から勧められたこともあって、興味を沸かせて読んでみました。

この書物は、浄土真宗の宗祖といわれている親鸞の亡き後、その教えの数々が誤解されて広まっていることに危惧を覚えた門弟の一人、唯円が著したと言われています。親鸞本人からの伝え聞きと、それにまつわる解釈が書かれています。

この書物の第9章は、
「阿弥陀様の御名を唱えても躍り上がるように喜べないし、正直言って喜び勇んで浄土に行きたいとも思わないんですよ、どうしたものでしょう」
と、唯円が親鸞に問うたという一節からはじまります。これに対し、親鸞は
「実は私もそう思っていたんだよ、唯円も同じ気持ちだったのだね。」

と答えます。そして

「でもね、喜べないし、死ぬのが怖い、でいいじゃない。そういう煩惱に生きている我々だし、そんな煩惱まみれだからこそなおさら確実に救われるんだろな、と思うよ。」

と続きます（だいぶ意識しております。詳しくは歎異抄をご覧ください）。

この部分を読んだ時にはひっくり返りました。

「親鸞さま、自分も喜べないって認めてしまうんですか！」と。

親鸞も「そう思っていた」のか、「そう思っている」のか、という解釈には実はいろんな説があるようなのですが、いずれにせよ、仏教の尊いとされる教えを受けても、なんだか違うなあ、と感じた唯円に対して、師である親鸞が、

「その違和感、分かるよ！」

と答えたという点に注目です。普段から、そんな話が出来るとな関係性と環境だったのだなと感じます。

何かに違和感を持ってもいい、またそれを口にしてもよい、と信じられる環境が身の回りにある事の大切さ、それによって新しい理解への道が開かれることを強く感じました。

最近では小学校や中学校の授業でも、ひとりひとりのオリジナリティのある答えを大切にしようという授業展開が見られます。しかし、そのオリジナリティは「当該担当教員の想定している範囲内」でのみ許されるものであり、「先生の想定される範囲内でのオリジナリティのある答え」＝「先生ウケがよい答え」を書くというお作法を知らず知らずに

学んできています。

日頃、そんな教育を受けてきた大学生の「先生ウケ」のよい答えを耳にしたり、目にすることがあります。その度に、「違和感を持っていいし、それを表現しているんだよ、それはとても大切なことだよ」と、自分に対しても、学生に対しても思うのです。

養成校教員としての姿勢

教科書、テキスト、今正しいとされている理論、うまくいくとされている手法、経験者のアドバイス。まずは正しいとされるやり方を知り、型どおりにやってみることが必要だと思います。それを教えるのが私たち養成校教員です。

しかし、その正しいとされるやり方が上手いかないときがあります。自分の目と耳と勘が、違和感を自らに教えてくれる時です。なんだかおかしい、どうもしっくりしない、うまい方法だとは思えない。そう感じた時に、その違和感を放っておかずに向き合える環境を整えておきたいと思っています。

「なぜこんな違和感があるのだろうか？」

「もしかしてこの方法は間違えているのか？」

「別の方法をとるべきなのか？」

「それとも、根本的に自分の解釈が間違えているのか？」

これらの考察を踏まえて「だから、どうしていくべきなのか」を考える。

その違和感は、大きな成長の種です。そうして、世の中で正しいとされていることは絶対ではない、と気づき、正しいとされていることを踏まえつつも自分なりの方法を見つけていくことが大切だと思います。

違和感の入り口に学生が立てるように、まず基本的に正しいとされていることを提示する事。

違和感の入り口に学生が立った時に、学生自ら答えを探すことを後押しする事。

「今正しいとされていることは、こういうことです。ここから先は、自分で学んで自分で得ていきましょう。可能であれば逆に私にも教えて下さい。私も気付いたことを伝えますよ。そうして、お互いに学びあうことが、より新しい理解につながる道だと思うんだよ」

これが、養成校教員が出来る事だと思います。

そうして、学生と共に学びを深めていく事は、何とも言えず楽しい事なのです。